

### 第3回市民活動支援センターのあり方検討委員会 視察概要

平成29年9月5日（火）9時～16時

四街道市・富里市

#### ①四街道市みんなで地域づくりセンター

四街道市役所シティセールス推進課 齋藤久光氏

四街道市みんなで地域づくりセンター 勝又恵里子氏

資料に基づき、四街道市の取り組みについて齋藤氏より説明

#### 【質疑応答】

Q.いろいろな委託先が想定されたと思いますが、委託先を選定する基準は。また、運営の体制についてお聞かせください。

A.（齋藤氏）基準については、お示しした仕様書のとおりです。現在、5名のコーディネーターと、勝又氏

に業務責任者として入っていただいています。センター自体は市の施設ですので、費用はかかっていません。

Q.委託費用のうち、人件費の占める割合は。職員の身分は。勤務のローテーションもお聞かせください。

A.（齋藤氏）7割ぐらいです。

A.（勝又氏）NPO クラブが業務を受託し、コーディネーターを雇用しています。ハローワークに求人するときには、パートで週3日程度、土曜日を月1回程度という条件で募集しています。センターは原則として火曜日から土曜日を開館日としており、火曜日から金曜日までは9時～20時30分、土曜日は9時～17時となっていますので、ローテーションを組んでいます。仕様書にあるとおり、平日9時～17時までは2人以上、平日夜間及び土曜日は1人以上のコーディネーターを配置することとなっていますが、実際には、もう少し多く配置しています。

A.（齋藤氏）会議室やコピー機等の貸し館機能がないことのメリットとして、デスクに張り付いている必要がありませんので、例えば4人配置していても、外に出て



現場で情報収集したり、取り組みのサポートに当たったりしていて、センターに 1 人しかいないこともあります。機能が限られているからこそ、そのようなことができるという面もあります。

**Q.**運営を NPO に委託した理由についてお聞かせください。

**A.**（齋藤氏）現実的な問題として、行政職員には異動があります。スキルを持った職員がいたとしても、ずっとその職場にいるわけではありません。その職員がいなくなった時点で、スキルやノウハウが途絶えてしまう恐れがあります。NPO に間に入っていただくことで、一定のベースをずっと維持できるというメリットがあります。そのためにも、行政職員があれこれ口出しせずに、センター側から「これをやりたい」という発案があれば、それが可能になるようにサポートすることが重要だと思います。また、当初は行政職員を配置して、直営する予定もありましたが、国の緊急雇用対策事業があり、事業者が人を雇用すれば補助金がもらえることとなったので、結果的に直営でなく委託することになりました。国の補助金のタイミングなどもありましたが、結果的に、「みんなで地域づくり」を進めていく上で、ベストな運営形態に決まったという状況です。

**Q.**コーディネーターの人材確保についてお聞かせください。

**A.**（勝又氏）仕様書に書いてあるプロデュースやネットワークづくりなどができる方という条件で公募し、面接や小論文を経て採用しています。受付だけでいいということではありませんので、課題を拾ったり、それをどうすればよいかと考えたりすることのできる方が必要です。相談者の話をよく聞いて、アドバイスをできることが求められます。自身に市民活動の経験がなくても、関心を持っていればかまいません。コーディネーター会議を月 2 回開催しており、そこに企画提案を持ち寄ったり、情報を共有したりしていますので、ある意味では、センターに入ってから研修を積んでいくということになります。募集要項では、例えばパソコンは最低限ワードやエクセルを使うことができる方、コーディネーターに向く方などと記載しています。一言でいえば人物重視、人柄重視です。

**Q.**齋藤さんのバックグラウンドをお聞かせいただきたいと思います。

**A.**（齋藤氏）私自身は四街道市民ではなく、違う市に住んでいます。地域とのつながりもありませんでした。その点で、まちを客観視することができると思います。

仕事としてシビアなやりとりをするときもありますので、地域とのつながりがあつたら、やりづらいかもしいないと思う場面はあります。みんなで地域づくりセンターの機能があるからこそ、見えてくる顔があり、それは私一人で得られたものではありません。ここで知り合った方々やつながりで得られたものから、行政の立場でできることを考えています。

**Q.**行政との連携がうまく取れていることによって、いろいろなことが長年の成果として表れているのではないかと思います。委託した後は文書でのやりとりだけという話もよく聞きますが、連携が素晴らしいと思います。コーディネーター会議等での連携がよく取れているということでしょうか。行政の仕事の割合としては、これにかかりきりでしょうか。

**A.**（齋藤氏）「人工（にんく）計算」というのがありますが、私の業務の中では、1割程度です。残りの9割は、違う仕事をしています。9時～17時で足りない場合は、市民の方や、団体の方のやりとりを、夜間でも朝でもやっていることもあります。センターとは、密に情報を共有するようにしています。

**A.**（勝又氏）NPO クラブには、もともと中間支援という機能がありますが、牧野代表などもときどき四街道に来て、会議に参加しています。コーディネーターたちが果たす役割がとても大きいと思います。

**Q.**事業計画と評価方法についてお聞かせください。

**A.**（齋藤氏）地域の課題は日々変化していますので、業務委託は3年間の契約になっていますが、次年度の計画は、当該年度の課題をベースにして、「この課題は進ちょくしてきたから、次年度はこうしよう」というようにしています。3年前に出した計画を逐一守らなくてはならないということにはしていません。地域でやったことの成果を元に、次の事業計画を立てています。外部の評価としては、「みんなで地域づくり推進委員会」を設置して、センターの取り組みについて議論していただいています。

**Q.**広報紙を拝見しましたが、茂原市の広報紙と異なるのは、事後の報告があまりなく、未来の情報が多く載っていることだと思います。広報一つ見てもそうですから、そのような考え方が行き渡っているのではないかと思います。昔からそのような方針なのでしょう。

A. (齋藤氏) 市民活動の一番の課題は、情報発信であると考えています。自分たちが何をしているのか、活動を伝えていく中で、広報紙は有効な媒体であると思います。もちろん、「このような活動をしました」という事後報告もありますが、これから取り組んでいくこと、市民活動の情報を発信して、多くの方に参加してもらえるようにする内容が多いと思います。他の自治体に比べて、広報紙のページ数が多いということはよく言われます。情報量が多いということは、それだけ多くの情報を届けられるということですので、活性化しやすくなります。知る機会が増えるという意味では、非常に重要な媒体だと思います。

Q.広報紙の配布方法について、茂原市では新聞折り込みをしていますが、若い世代やお年寄りで、新聞を取らない人も増えており、情報を発信していくことは、非常に難しくなっています。齋藤さん個人は、団体の方たちと SNS 等でネットワークを作っていますか。

A. (齋藤氏) 作っています。さまざまな団体がありますので、いろいろと顔を出しています。今では 20 個くらいのグループがあります。

Q.広報紙は、どのように配布していますか。

A. (齋藤氏) 四街道市では、シルバー人材センターにお願いして、全戸に配布していますので、広報紙が全住民に届いています。見る・見ないは別として、100%の住民に届く媒体を有しているということになります。

Q.茂原市では、公共施設に広報紙を配置していますが、四街道市でもそうでしょうか。

A. (齋藤氏) 同じです。

Q.ボランティアセンターとみんなで地域づくりセンターの関わり、市と社会福祉協議会の関わりについてお聞かせください。

A. (齋藤氏) みんなで地域づくりセンターの設置当時は、ボランティアセンターと何が異なるのか、違いが分からないという声もあったようです。ボランティアセンターは福祉をベースにした関わりが多いのが特徴だと思いますが、みんなで地域づくりセンターでは福祉に限らず、多岐にわたる行政課題がある中で、横串を刺している点が特徴だと思います。最近では、夏休みのボランティア体験などの際に、ボランティアセンターにもご協力いただくなど、情報共有しています。ヒアリングな

どもさせていただいています。また、「地域支え合い体制づくり事業」の推進会議の構成員として、社会福祉協議会やボランティアセンター、地域包括支援センターと並んでみんなで地域づくりセンターも加わっており、推進役としてともに担っていくということになっています。去年あたりから、情報交換をしましょうということになり、そのような機会も1回設けました。

**Q.**社会福祉協議会でも、障害者の就労支援や子どもたちの学習支援などが課題になっていますが、福祉だけに限定されずに、商工などさまざまな分野を巻き込むことがまさに協働だと思います。福祉の分野の取り組みを行うときに、企画の立案など要所要所で社会福祉協議会の職員が加わるというところまでは、まだいかないということでしょうか。

**A.**（勝又氏）社会福祉協議会から、情報を共有していくために、コーディネーター会議に参加したいという話がありました。参加してもらえれば、現在、どのような企画が動いているのかを共有することができます。また、子育て支援交流会の際に、学習支援をしている方の話を聞くなど、適宜情報交換をするようにしています。

**Q.**もともと社会福祉協議会で似たような事業をしている場合もあります。選ぶ人の選択肢があってもいいと思いますが、それとは別で進めていくということになるのでしょうか。

**A.**（齋藤氏）相反したり、お互いにマイナス作用が働いたりしないのであれば、関わる主体が多様であることによって、いろいろな可能性が生まれると思います。「連携すればいい」とよく言われますが、連携がうまくいかない場合もありますので、無理に一緒にやる必要はありません。協働は、いっしょにやることではなく、プラスを生む活動になるのであれば連携して取り組むものだと思います。例えば、チームよつてらの学習支援でいえば、学生たちは自分たちで自分たちの活動を担っていきたいと考えており、これは続けていくべき一つの大きなモチベーションになると思います。そのためには、よく声を聞かなくてはなりません。大人の事情で、無理に他と連携しなくてはならないとなると、「それまで自分たちがやってきたことは何だったのか」ということになってしまいます。情報共有をしていくことによって、そのようなことも解消できるのではないかと思います。ケースバイケースだと思いますので、それを見極める能力がないといけないのではないかと思います。

Q.地域包括支援センターとみんなで地域づくりセンターの棲み分け、一緒にやっていること、認知症カフェの四街道市における進ちょく状況についてお聞かせください。

A.（齋藤氏）地域包括支援センターとみんなで地域づくりセンターは、機能が異なり、担う業務も違いますが、支え合い体制づくりを検討する協議会の構成員として、社会福祉協議会や民生・児童委員などと並んで参加しています。また、自治会意見交換会で、高齢化の課題というテーマについて話し合ったときには、高齢者支援課や包括支援センターの方に来ていただきました。

A.（勝又氏）最近は、できるだけ情報を共有する場を持つように心がけています。具体的な事例としては、高齢者支援施設の方が、高齢者だけでなく、一般の市民も交流する場をつくりたいという考えを持っており、認知症カフェについての相談も寄せられています。その際には、地域包括支援センターも話を聞いていますので、ケースバイケースで連携している状況です。

Q.受託している NPO クラブは、県内どこでも活動されているのでしょうか。

A.（勝又氏）事務所は千葉市にあり、県域で活動しています。

Q.団体が何か打ち合わせしたいというときには、このスペースが使えるのでしょうか。

A.（齋藤氏）大きなテーブルが唯一の打ち合わせスペースですので、空いていれば使えます。同時進行で 3 つくらい打ち合わせするときもあります。会場を区切ってしまうと、他の場所の話を聞くことはできませんが、区切っていないので、お互いに声を拾ってしまいます。そこから話が始まるときもありますので、区切らない良さもあると思います。

Q.センターは開館 7 年とのことですが、コーディネーターの経験年数は。

A.（齋藤氏）一番長くて 7 年ですが、おおむね 5～6 年、最も短い方で 1 年未満です。

【視察の様子】



みんなで地域づくりセンターの入口



配架方法にも一工夫がありました



四街道市シティセールス推進課 齋藤氏、みんなで地域づくりセンター 勝又氏の説明を聞く参加者



視察を終えて参加者全員で撮影



空き家を活用したコミュニティレストラン「さくらそう」

## ②富里市市民活動サポートセンター

富里市役所市民活動推進課 伊東英朗氏、渡辺祐一氏

富里市市民活動サポートセンター 河田厚子氏、平野希氏

資料に基づき、富里市の取り組みについて渡辺氏より説明

### 【質疑応答】

Q.富里市の高齢化率はどのくらいですか。

A.（渡辺氏）高齢化率は、他の地域と比べたらやや低いですが、「とみっけ」のハッシュタグ「富里いいね！」の取り組みは、若い人にどれくらい関心を持ってもら



えるかという観点から始めたものです。もちろん、高齢者の方にもご参加いただきたいと思いますが、どちらかというと、若者目線からスタートした事業です。また、「ちい寄附」については、「市民活動」というと、一步踏み出す勇気がなかなか難しいところを、寄附を通じてまちづくりに参加していただけないかと考えてスタートした事業です。ちばのWA地域づくり基金というところが、「カンパイチャリティキャンペーン」という事業をすでに実施していたので、その行政版です。例えば、飲食店で通常一人800円のところを850円とし、その50円を富里市のふるさと応援寄附金に寄附して、市民活動の活性化を図るというものです。16店舗にご参加いただきましたが、事業を実施していると、どんどん輪が広がり、「うちも協力できるよ」という声もいただきました。年3回の実施を予定していますが、次回はもっと広がると考えています。集まった寄附金については、市民活動推進課で所管している「市民活動支援補助金」の原資として使わせていただきます。寄附が増えることによって、富里市のまちづくりに関心を持っていただけるようになると思います。お店の方も、「これは何ですか」と聞かれるようになるため、まちづくりについて知っておく必要がありますので、まちづくりに関心を持つ人をどんどん増やすための事業でもあると考えています。

Q.「富里市市民活動サポートセンター検討委員会」の3回目の会議において、「富里

市ボランティアセンター（富里市社会福祉協議会）との連携について」という内容で話し合ったと伺いました。茂原市でも次回 10 月の会議において、全く同じ内容を話し合う予定となっていますので、どのようなことを話し合ったのか、お聞かせください。また、進ちよく状況の中に、「社会福祉協議会との連携」という項目がありますが、平成 28 年度に情報交換会を行ったと報告されています。社会福祉協議会との連携・協働についてお聞かせください。

A.（渡辺氏）検討委員会が行われていたのは、私が異動してくる前の話になるので、分かる範囲でお答えしますが、サポートセンターができた当初は、社会福祉協議会のボランティアセンターとどこが違うのかという意見が多く寄せられていたそうです。ボランティアセンターは福祉に特化したものであり、サポートセンターは福祉にとらわれず、まちづくり全般に支援するというイメージでいましたので、ボランティアセンターは今までどおり運営していただき、何か相談があったときには必ずボランティアセンターにも連絡して連携を図るよう努めました。ボランティアセンターにどのような人が登録しているのかを知り、人材情報の共有を図りたいと考え、社会教育を所管する生涯学習課とも連携し、情報交換会を開催しました。その中で、「どういう団体が何をしているか」までは共有できるのではないかという話になりました。その次には進めていませんが、人材情報を毎年更新すれば、市民がどこの課に相談しに行っても、情報を共有できているので、つなぐことができると考えています。例えば、里山保全に取り組んでいる団体に入りたいという相談が寄せられたとき、私どもの課では対応できますが、生涯学習課や学校教育課に相談に来たときにも、「サポートセンターでくわしく分かると思います」といったように、ワンストップとなれるようにできればと考えています。

Q.富里市協働のまちづくり推進計画の進ちよく状況を拝見しましたが、様式が行政内部寄りの文書になっていると感じました。この紙面からは、実際にまちづくりをしている団体や NPO の姿が見えにくいように思います。これまで、まちづくりは行政が主体となってやってきましたが、今は地方財政も厳しくなり、なるべく市民の力を借りようという方向に進んでいます。市民のニーズをいかにとらえ、行政に伝えていくか、あるいは市民がそのニーズを自己解決するために、行政を巻き込んでいくかという、今までにないダイナミックな動きが期待されると思います。

A. (渡辺氏) それぞれの事業ごとに、市民活動団体同士のいろいろな連携を図っています。基本的には、行政から「何かをしてください」というのではなく、同じ立場で意見を出し合いながら、良い方向に進めていこうとするのが協働であるというイメージを持っています。例えば、「地域づくり協議会などの地域ネットワークの促進」に取り組んでいますが、既存の区長会や PTA、市民活動団体など、いろいろな団体が横のつながりを持ってネットワークを組織する小学校区単位の協議会について、市内の全小学校区で立ち上げようと取り組んでいます。成田市に近い日吉台という小学校区に「日吉台小学校区連絡協議会」という組織があり、その中には市民活動団体の皆さんも加わっています。日吉台の中央通りの街路樹を整備している「ひよしグリーンロード再生会」という会がありますが、その団体とも連携を図っています。本来は、市の道路ですから、市が管理すべき部分を、市と協定を結んで日頃の管理をお願いしており、市民活動推進課では、補助金等で支援するなど、いろいろな関わりがあります。市民活動サポートセンターができたこともあり、いろいろな団体と話をしています。フラダンスの企画も、予算はありませんでしたが、市民活動団体の皆さんと話をするうちに賛同が増え、ドローンを持っている団体に撮影していただくなど、いろいろなご協力をいただいています。団体支援という「点」ではなく、「面」で捉えたいと考えています。

Q.市民活動団体が事業に取り組もうとしたときに、行政が考えている方向に向いてしまうということが往々にしてありがちだと思います。私たちの周りでも、そのような感想がよく寄せられます。もっと住民が主体性を持って、住民側から市に提言するようであれば、協働ということにならないと思います。例えば、「いきいきサロン」事業を、当事者だけが計画すれば平凡なものになりますが、そこに地域の食材を使ったり、芸能活動をしている人材を活かしたりすれば、協働のまちづくりの一環になると思います。そのような、行政が後ろに回って、住民が前に出てくるようなまちづくりの事例があれば教えていただきたいと思います。

A. (渡辺氏) 例えば、市民活動フェスタは、市の主催ではありますが、市民活動団体を市民に知っていただくものであり、企画段階から市民活動団体の皆さんに会議に加わっていただき、みんなでアイデアを出しています。行政単独で実施するよりも効果的になるものが協働ですので、行政からあまり口出ししていません。

Q.「協働のまちづくり推進計画の進捗状況」を見ると、実施主体と対象者とありますが、大体的場合、実施主体が市で、対象者が市民となっており、市民目線でないように感じます。

A.（渡辺氏）市単独ではなく、市民の皆さんと一緒に取り組んでいるというイメージで捉えていただければと思います。対象者は、「関連している方」、「連携したい方」とお考えください。

Q.茂原市の場合は、団体は、行政が計画したものについて、前年度を参考にして実施していることが多いと思います。

A.（渡辺氏）「協働のまちづくり推進計画の進捗状況」は行政が作成している文書ですので、多少固いイメージがあるかもしれません。補助金もそうですが、あまり行政が手を差し伸べすぎると、団体の自主性を奪うことになってしまいます。団体が持続できるようにするのが、市民活動サポートセンターの役割だと思います。対等な、良い関係性を築けたらと考えています。行政の補助金は初期支援であり、団体が自立するためにどのような支援ができるのかがステップアップ支援だと思います。

Q.茂原市の場合は、行政と接する団体の代表は高齢者が多いです。若い人材がそう多くないということもありますが、富里市は首都圏に近いこともあり、いろいろな人材が多いのではないかと思います。

A.（伊東氏）市の「協働のまちづくり条例」を元に、検討委員会からご意見をいただいて、市の協働のまちづくり推進計画を策定しましたので、市が関わる部分は市が取り組むことになっています。条例では、「市民活動団体」に区長会や NPO など、地域で公益的な活動をしている団体を幅広く含めています。推進計画に「情報交換の場づくり」という項目がありますが、地域の市民活動団体の皆さんが実施主体となって動いていただき、市もいろいろなご意見をいただく場となりますので、対象者のところに市も含めています。将来的には、ご意見いただいたように、市民活動団体が主体となって事業を行う計画になると思いますが、現在の計画は条例に基づいて市が実施するものになっていますので、「場づくり」についても市が関わっているのが実情です。ただ、市から「こうしてほしい」と言うのではなく、地域の方のお考えを元に、計画を推進してまいりたいと考えています。

Q.補助金に「キックオフ部門」など 3 種類がありますが、その違いについて教えて

ください。

A. (渡辺氏)「キックオフ部門」は、発足して1年半未満の団体が使えるものとなっています。市民活動団体を増やしていきたいという思いから、このようなものを設けています。立ち上げ直後は、団体も予算がないことが多いため、上限額は5万円ですが、補助率は10/10となっています。「チャレンジ部門」は、発足期間の要件はなく、自主的に取り組む活動への補助であり、上限15万円、補助率2/3、1事業2回限りです。富里市の市民活動支援補助金は、団体への補助金ではなく、事業への補助金としており、チャレンジ部門やコラボ部門は、1事業2回限りと設定しましたので、団体が、ある事業を2回申請したとしても、新規事業であれば再び応募することができます。「コラボ部門」は、1団体で取り組むよりも、複数の団体で取り組んだ方がより効果が得られるような事業に対して補助するもので、上限20万円、補助率2/3、1事業2回限りとなっています。市の補助金ですので、書いていただく書類も多くなってしまっていますが、なるべく団体に寄り添って、ご相談を受けながら進めています。

Q.まちづくりサポーターは、何名いらっしゃいますか。

A. (渡辺氏) 担い手が減ってきているという現状から、市民活動に必要なスキルを身に付けていただくために、「とみさと協働塾」という事業を実施しています。去年は、6名がまちづくりサポーターとして登録されました。平成27年度は13名ほどを輩出していますので、現在は20名くらいが登録しています。

A. (渡辺氏) 推進計画の補足として、計画書や進捗状況の表現は固くなってしまっていますが、単にパブリックコメント等を実施したものではなく、計画の時点から市民の皆さんに加わっていただき、いろいろな意見を出して作り上げたものです。

Q.富里市の協働のまちづくりは、市長の公約から始まり、条例が先にできて、予算も潤沢ということでしょうか。

A. (渡辺氏) 市長からは協働を進めるようにと指示を受けています。一方で、財政部局からは、優先順位を付けて予算を組むようにと言われております。

【視察の様子】



市民活動サポートセンターの団体情報の配架の様子



富里市市民協働推進課 伊東氏、渡辺氏の説明を聞く参加者



センターの一角にはキッズスペースもありました



印刷機、紙折り機、裁断機などがそろった作業スペース



センター職員の河田氏・平野氏から話を聞く参加者



視察を終えて参加者全員で撮影

### ③参加者の感想（視察帰路の車中にて）

- 市民活動支援センターとボランティアセンターの今後の関係性について興味がありましたが、伺ったどちらの自治体も、関わる場所は関わって、そうでないところはそれぞれが取り組めばいいのではないかという話をされていて、大変参考になりました。今後も、協力できるところは協力しながら、ボランティアセンターもますます盛り立てていきたいと思います。今後ともよろしく願います。
- 今日は、参加させていただき、ありがとうございました。本日伺った自治体は、両方とも協働のまちづくり条例があり、それに伴った行動計画ができていました。計画に伴って、実際に動いているところを聞き、すごいなと思って話を伺っていました。茂原市にも、まちづくり条例に基づく行動計画がありますので、見習いたいと思います。私は、かねがね市民活動支援センターを作りたいと言っていましたが、予算がないと言われてきました。今日はいろいろ勉強させていただき、大変参考になりました。ありがとうございました。
- 今日は、ありがとうございました。2か所を比較検討することができて大変良かったということと、事業の運営から中身までくわしい話を伺って、大変参考になりました。やはり、行ってみないとわからないこともありました。ありがとうございました。
- 今日、一番多く質問したかもしれませんが、その根底は住民目線です。住民ニーズをいかにして行政が捉えるか、そして一緒に行動していくのかという視点で質問しました。茂原市の場合も、どこに視点を置くかをはっきりさせてから、今後の議論に入ったほうがいいのではないかと感じました。ありがとうございました。
- 今回、地域づくりをする中で、さまざまな工夫をしていることをお聞きすることができました。私もいろいろなボランティアをしています。場づくりに苦勞しているという話を耳にします。そのような人たちの起点となるようなセンターがあれば、ボランティアがますます活躍できるようになると思います。今回お聞きした事例では、中学生や高校生、大学生も巻き込んでいましたが、いろいろな年齢がまちづくりに参加していました。茂原市の場合、高齢者が余

暇の延長でやっているようなケースも多いです。もっと若い人たちを巻き込んでいかななくてはならないと、改めて実感しました。ありがとうございました。

- 四街道市のアイデアと情報、ネットワークで頑張っている姿、富里市の全体をがっちり固めてハードも整っている姿、2か所を見せていただき、大変勉強になりました。これから、茂原市でも見習っていかななくてはならないと思いました。ありがとうございました。
- 大きく印象に残ったことが2点あります。1つは、やはり拠点というものが必要と感じたことです。拠点をつくることによって、いろいろな情報が広がるし、情報が集まるのだということを実感しました。もう1点は、市の広報紙を全戸配布しているということに、非常に感銘を受けました。
- 今日はありがとうございました。感じたことは、情報の発信と共有、人材と人の輪、人づくり、つながりが大事だということです。ありがとうございました。
- 特に四街道市の事例を伺って、これまでは、市民から市に言っても「予算がない」「前例がない」とほぼ100%受け入れてもらえませんでした。四街道市のようなセンターがあれば、ワンクッション入れて、市民の本当の生の声を聞いてもらえるということで、とても希望が持てました。今回も、市のバスを仕立てて視察に行きましたが、茂原市にも希望が持てると思いました。ありがとうございました。
- 今日、参加するまでは、「皆さんは何を目指しているんだろう？」とよくわかりませんでした。参加して少し分かりました。ありがとうございました。

#### ④視察に参加した感想（後日）

別紙のとおり